

# 中学生における友人に対する感情に関する研究

## —自己開示および本来感との相互影響性の検討—

田中 沙依\*・下田 芳幸

### Study about emotional feelings toward friends among junior high school students

Sae TANAKA・Yoshiyuki SHIMODA

#### 摘 要

本研究の目的は、青年期の重要な人間関係である友人関係に焦点をあて、友人に対する感情と自己開示、及び本来感との関連性を明らかにすることであった。2波のパネル調査で得られた中学生304名のデータをもとに検証した結果、男女ともに本来感が友人に対する信頼・安定を高め、男子は本来感が友人に対する独立を高め、女子は友人に対する葛藤が本来感を低めること、自己開示と友人に対する信頼・安定が関連すること、男子はライバル意識が自己開示を高める一方、女子は葛藤が自己開示を低めることが明らかとなった。このように、それぞれの関連性において男女で異なった結果が得られたことから、男女差を加味したさらなる検討が必要である。

キーワード：中学生，友人関係，友人に対する感情，自己開示，本来感

keywords：junior high school students, friendship, feelings toward friends, self-disclosure, sense of authenticity

#### 問題 と 目的

近年、教育現場ではいじめや不登校、学級崩壊といった、様々な生徒の学校不適応が大きな問題となっている。特に中学生に関して問題はより深刻であり、文部科学省の調査(2012)によると、いじめ1校あたりの認知件数は、小学校で1.5件、中学校で2.8件、高等学校で1.1件となっており、中学校では小学校や高等学校の数値を大きく上回っている。また不登校に関しては、全生徒に対する不登校生徒の割合が、小学校では0.33%なのに対して中学校では2.64%、つまり38人に1人が不登校生徒であると報告されている。さらに不登校児童生徒の在籍学校数は、小学校は43.7%なのに対して中学校は86.5%というかなり高い割合となっている。以上のことから、学校段階の中でも特に中学生において、いじめや不登校といった学校不適応に関する問題は深刻であることがうかがわれる。

こういった学校不適応の背景要因に関して松永・岩本(2008)は、社会的スキルの不足と、対人関係上の問題という2点を指摘している。

前者について、例えば戸ヶ崎・岡安・坂野(1997)は、社会的スキルの低さがストレスの多さやストレス反応表出と関連していることを示したほか、曾山・本間・谷口(2004)が、不登校経験のある中学生はそうでない場合と比較して、友人との関係づくりのスキルが低いことを報告しており、社会的スキルの低さと学校不適応のリスクとの間には一定の関連があるといえる。

後者に関しては、“青年にとって最も重要な人間関係は友人関係である”という指摘(遠矢, 1996)を踏まえると、学校不適応に関連する要因として、対人関係の中でも、特に友人関係からの影響を強く受けることが予想される。実際、先述の文部科学省の調査(2012)においても、例えば不登校の要因として、友人関係に関する項目の占める割合は高くなっている。松下・吉田(2007)は、現代青年の友人関係における希薄化を、岡田(1995)の群れ関係、気遣い関係、関係回避の3分類に関する知見を引用しながら論じている。また松永・岩本(2008)は、現代青年の友人関係は希薄化が進行しており、友人への配慮の欠如や関係を持つという意識の低さなど、友人関係に対する無関心といえるような傾向がみられ、これも学校不適応を引き起こす要因の1

\*2013年3月卒業

つであると指摘している。

ところで、こういった青年期の友人関係に関して、榎本(1999)は、青年(中学生、高校生、大学生)の友人関係の中で行われている行動の背景にどのような感情があるのか、という観点に基づいて、友人関係を構造的に捉えた。それによると、青年が友人に対して抱く感情は、“信頼・安定”、“不安・懸念”、“独立”、“ライバル意識”、“葛藤”の五つに分類される。そして榎本(1999)は、“ライバル意識”、“葛藤”は男子の方がより強く感じている一方、“信頼・安定”、“不安・懸念”は女子の方が強く感じていることを明らかにした。また、中学生は他の学校段階と比較して、特に“ライバル意識”と“不安・懸念”を強く感じていることが明らかとなった。また高坂(2010)の調査によると、“自分が異質な存在に見られることに対する不安”は、中学生が高校生・大学生とくらべて高い。

このように、中学生における“友人に対して抱く感情”には様々なものが存在し、学校不適応を引き起こす原因の一つである友人関係における問題には、生徒が友人に対して抱く感情が複雑に絡み合っていることが考えられる。特に中学生という時期は青年期の中でも思春期前半にあたり、この時期にはチャムグループ(chum-group)という仲間関係が見られる。チャムグループとは同一言語による一体感の確認を特徴とし、特に女子に多く見られる同性同輩集団のことを指す(保坂, 1996)。すなわちチャムグループでは、互いの共通点や類似点を確かめ合うことが基本となる。橋詰(2010)は、中学生という時期は同性の親しい友人との同質性を求める段階であり、自分を素直に率直に表現するには困難が伴い、なかなか本音を出すことが難しい時期である、と指摘している。またこの時期の友人との付き合い方の特徴の一つとして保坂(1993)は、“自分が属しているグループからはみ出ないように並々ならぬ努力をしている”ことを指摘しており、さらに藤井(2001)は“相手と親密な関係を持ちたい一方で傷つけ合うことを恐れ、適度な心理的距離を模索して揺れ動いている”と述べている。あるいは“互いの関係を壊さないように一生懸命気を遣い、相手との距離をはかることに心を砕く子供が多い”(伊藤, 2006)との指摘もあるように、中学生は総じて、自分の本音を抑えてでも友人に合わせようとする自己防衛的な傾向があり、またその結果として、友人

との付き合いに疲れを感じてしまっている可能性が考えられる。つまり、外から見える友人関係とその背後に存在する友人に対して抱いている感情は、実際のところ同等なものではなく、食い違いが生じている可能性も考えられる。したがって、“友人に対する感情”と、先に述べた社会的スキル、とりわけ友人関係におけるスキルとの関連を検討することは、中学生の学校不適応予防や学校適応促進に有効な知見を提供すると考えられる。

ところで、中学生における社会的スキルには、様々なものが含まれる(飯田, 2003; 嶋田, 1998; 戸ヶ崎ら, 1997)。そこで本研究ではこれら多様なスキルないし相互交渉行為のうち、新たな友人関係を開始したり、既存の関係を維持・継続したりする側面に関係する、自己開示に着目した。

自己開示を心理学的に初めて取り扱った Jourard(1971)によると、自己開示は“自分自身をあらわにする行為であり、他人たちが知覚しうるよう自身を示す行為である”とされる。日本における自己開示研究でも“自分自身についての情報を、他者に言語的にありのままに伝えること”(松島, 2000)、“自分のことを偽りなく他者に本音で話すこと”(橋詰, 2010)といった定義がなされることが多く、主に言語的な手段を通じて、自分自身に関する情報を伝えること、となる<sup>1)</sup>。

また Jourard(1971)が“自己開示はパーソナリティ健康のしるしであり、健康なパーソナリティを至高に達成する手段である”と述べているように、自己開示は精神的健康と強く結び付いていること、カタルシス機能があり、精神的安定をもたらす効果がある点などが特徴的である。そして中村(1985)によると、文脈に沿った適切な自己開示は、対人魅力に対して大きな影響を及ぼす。あるいは、自己開示と孤独感は負の関連を示すといった報告もある(高木, 2006)。したがって、友人関係におけるスキルの1つに自己開示を位置づけることは、意義あることと思われる。

しかしながら、中学生を対象に自己開示と学級適応や精神的健康との関連を検討した研究は、さほど多くない。その中で、例えば小口(1991)によると、小学生の自己開示と教師評定による学校適応は、女子において正の相関を示す。また小野寺・河村(2002a)は、中学生を対象とした調査研究から、特に中学生の適応を支える社会的スキルとして自己

開示の重要性を指摘し、友人への自己開示が様々な適応を高めること、学級集団内における自己開示も生徒の学校適応感に影響を与えることも報告している。同様に岡田(2006)も、内容的な自己開示が学校適応感と関連することを報告している。さらに、中学生において自己開示は孤独感と負の関連を示すといった報告(松島・塩見, 2000)や、学級風土尺度の中に自然な自己開示に関する下位尺度が含まれる場合もある(伊藤・松井, 2001)ことから、自己開示という対人関係を円滑に進めるための社会的スキルは、中学生の学級適応や精神的健康を考える際に、非常に重要な役割を果たすものだと考えられる。

次に、自己開示との関連を検討する精神的健康の指標として、本研究では本来感に着目した。本来感とは、外的な価値基準(随伴性自尊感情)ではなく、自己内価値基準による自尊感情であり、自分自身について“これでよい(good enough)”と捉える感覚、あるいは“自分らしくある感覚”とされる(伊藤・児玉, 2005)。

中学生における本来感を検討した折笠・庄司(2010)によると、本来感が高い者は学級満足度が高く、また生徒の本来感を高めるような教師の働きかけが、学級や学校での不適応問題の解決の一助となり得ることが明らかとなった。また本来感は、ストレス反応と負の関連を示すことも分かっている(鈴木・小川, 2008)。したがって、本来感を上げることは、学級適応と精神的健康の両方にまたがる知見を得ることが可能となる。

最後に、本研究の研究デザインについて述べる。従来の心理学研究では、1時点の調査で得られたデータを用い、そこに含まれる変数間の関連を検討したものがほとんどである。しかし高比良・安藤・坂元(2006)が指摘するように、変数間の時間的因果関係が保証されない1時点の測定のみでは、(複数の)同値モデルが存在してしまい因果関係の想定が困難になる、といった問題がある。

したがって、時間的先行性を加味できるパネル調査デザインを用いることにより、本研究で取り上げる変数間の(グレンジャー的)因果関係が、よりよい精度で明らかになることが期待される。なお、本研究に関連する2波のパネル調査デザインを用いた研究はこれまでのところ見当たらないため、調査の間隔をどの程度にすればよいか、という点に関する知見がない。そこで本研究では、7月と10月という、

約3ヶ月の期間を開けることとした。この設定により、1学期の後半における生徒の状態が、2学期が始まって一定期間経過した後の状態を予測するのに役立つ、と判断したためである。

以上より本研究では、中学生を対象に、友人に対する感情と親友への自己開示および本来感との経時的な関連性を検討することにより、友人関係に関する知見を得ることを目的とする。

## 方 法

### 調査協力者

北陸地方の市立中学校に通う1—3年生365名(男子178名, 女子187名)であった。そのうち、記入漏れや記入ミスがあった回答者を除いた304名(男子147名, 女子157名)を分析の対象とした<sup>2)</sup>。

### 調査時期

1回目の調査(Time1; 以下, T1)は2012年7月、2回目の調査(Time2; 以下, T2)は2012年10月であった。

### 使用した尺度

調査用紙は、フェイス・シート(調査の目的やの概要、プライバシーの保護および回答拒否の権利の説明、学年、組、出席番号、年齢、性別を記入する項目)のほか、以下の3尺度から構成された<sup>3)</sup>。

**友人に対する感情** 榎本(2003)が作成した友人関係を多面的に捉える尺度のうち、“友人に対する感情”の尺度を使用した。

本尺度は“信頼・安定”(8項目)、“独立”(3項目)、“不安・懸念”(7項目)、“葛藤”(4項目)、“ライバル意識”(3項目)の5下位尺度(25項目)から構成されている。“質問をよく読み、同性の親しい友人との関わりについてあなた自身にあてはまる番号に○をつけてください”という教示に続き、各項目に“まったく思わない”から“とてもよく思う”の6件法で回答する形式であり、それぞれの得点を1—6点とした。したがって得点が高くなるほど、同性の親しい友人に対する、各下位尺度の名称となっている感情を強く抱いている、と解釈される。

なお本尺度は榎本(1999, 2003)により、内的整合性( $\alpha = .68-.83$ )が報告されているほか、生活への適応感や友人への欲求・友人との行動と一定の関連性を示していることから、ある程度の妥当性を有していると考えられる。

**本来感** 伊藤・小玉（2005）が作成した本来感尺度をもとに鈴木・小川（2008）が中学生に適用したものを使用した。

本尺度は1因子構造で、6項目から構成されている。“質問をよく読み、あなた自身にあてはまる番号に○をつけてください”という教示に続き、各項目に“あてはまらない”から“あてはまる”の4件法で回答する形式であり、それぞれの得点を1－4点とした。したがって得点が高くなるほど、自分らしさの感覚を強く持っている、と解釈される。

なお本尺度は伊藤・小玉（2005）により、高い再検査信頼性（ $r=.70$ ）と内的整合性（ $\alpha=.79$ ）、そして主観的幸福感および心理的 well-being の視点からの一定の妥当性（自尊感情との弁別性を含む）が報告されている。

**自己開示** 小野寺・河村（2002b）が作成した、中学生用自己開示尺度のうち、“親友”に対するものをを用いた。

本尺度は1因子構造で、13項目から構成されている。“あなたは、同性の親しい友人に対して、どの程度自分を打ち明けて話をしていますか？”という教示に続き、開示するトピックが書かれた各項目について“自分の思っていることを話さない。または嘘を言う”から“自分の思っていることをだいたいは話をする”までの4件法で回答する形式であり、それぞれを1－4点とした。したがって得点が高くなるほど、同性の親しい友人に様々なトピックを自己開示する傾向にある、と解釈される。

なお本尺度（親友）は小野寺・河村（2002b）により、高い再検査信頼性（ $r=.73$ ）と内的整合性（ $\alpha=.91$ ）、そして学級担任による評定による一定の妥当性が報告されている。

### 手続き

調査協力が得られた学校において、帰りの会などの時間を利用し、尺度を1組に綴じたアンケート用紙を、クラス担任を通じて一斉に配布・実施し、その場で回収した。なお、出席番号は2回の調査で同一回答者の一致を図るためだけに用いられること、回答内容は調査者のみが見るといったプライバシーの保護に関すること、回答は任意であり、協力を拒否した場合でも不利益は一切被らないこと、といった倫理面の説明を行った上で、調査は無記名式で行った。

なお、調査協力へのお礼として、結果の一部を集

計し、個人データを含まず一般的傾向としてまとめたものにコメントを添えて、“手軽にできるリラックス法”の生徒配布用プリントとともに、調査協力校へ提出した。

## 結 果

本研究では、帰無仮説の棄却を危険率5%で判断した。分析ソフトには、R(2.15.2)とAmos(ver.19)を使用した。

### 各（下位）尺度得点の基礎統計

得られたデータの基礎的情報として、平均値、標準偏差、T1時の各（下位）尺度の内的一貫性（ $\omega$ ）および2要因（性別×実施時期）の分散分析結果をまとめたものを、Table 1に示す。

分析の結果、本研究で使用した尺度の内的一貫性は、男子で $\omega=.77-.95$ 、女子で $\omega=.83-.93$ であったことから、分析に耐えうる信頼性を有していると判断した。

また、友人に対する感情のうち“不安・懸念”と“ライバル意識”の性別の主効果がそれぞれ有意であり、前者は女子が男子より、後者は男子が女子より若干高かった。また“自己開示”も性別の主効果が有意であり、女子が男子より若干高かった。

### 尺度間の相関

2波のパネルデータの分析に先立ち、各（下位）尺度間の関連について検討するため、各（下位）尺度のT1とT2のデータを用いて、相関係数を算出した。結果をTable 2に示す。

2時点間での各下位尺度間の相関係数に着目すると、男子に関しては、T1の“信頼・安定”および“独立”がT2の“本来感”および“自己開示”と正の、T1の“不安・懸念”および“葛藤”がT2の“本来感”と負の、T1の“ライバル意識”がT2の“自己開示”と正の、T1の“本来感”および“自己開示”がT2の“信頼・安定”および“独立”と正の、T1の“本来感”がT2の“不安・懸念”および“葛藤”と負の、T1の“自己開示”がT2の“ライバル意識”と正の、それぞれ有意な相関を示した。

女子に関しては、T1の“信頼・安定”および“独立”がT2の“本来感”および“自己開示”と正の、T1の“不安・懸念”と“葛藤”がT2の“本来感”および“自己開示”と負の、T1の“本来感”および“自己開示”がT2の“信頼・安定”と正の、“葛藤”と負

Table 1 本研究データの基礎統計および分散分析結果

	男子 (n=147)				女子 (n=157)				分散分析結果					
	T1		T2		T1		T2		性別		実施時期		交互作用	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	F 値	$\eta^2$	F 値	$\eta^2$	F 値	$\eta^2$
友人に対する感情														
信頼・安定	34.61	7.53	34.56	8.48	35.58	7.38	34.73	7.65	0.50	.00	1.44	.00	1.15	.00
独立	12.71	3.00	12.88	3.19	12.66	3.02	12.54	2.93	0.44	.00	0.03	.00	0.85	.00
不安・懸念	18.55	6.93	18.97	7.92	20.90	6.74	19.92	6.85	5.18*	.01	0.56	.00	3.46	.00
葛藤	9.55	4.03	9.63	4.40	9.95	4.19	10.01	3.97	0.81	.00	0.11	.00	0.00	.00
ライバル意識	10.71	3.57	10.62	3.98	9.87	3.58	9.45	3.63	6.76*	.02	2.22	.00	0.94	.00
本来感	24.13	4.94	23.64	5.67	23.45	5.11	22.92	5.62	1.62	.00	3.51	.00	0.01	.00
自己開示	35.01	8.95	34.79	9.68	37.52	7.73	36.99	7.70	7.52*	.02	0.64	.00	0.11	.00

T1: Time1, T2: Time2. \* $p < .05$

Table 2 各下位尺度間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
1 信頼・安定 (T1)	—	.37*	-.35*	-.42*	.18*	.54*	.43*	.69*	.21*	-.18*	-.32*	.12	.40*	.36*
2 独立 (T1)	.51*	—	-.34*	-.47*	.22*	.42*	.24*	.26*	.61*	-.29*	-.48*	.12	.42*	.21*
3 不安 (T1)	-.17*	-.27*	—	.63*	.22*	-.47*	-.10	-.34*	-.37*	.67*	.52*	.14	-.30*	-.30*
4 葛藤・懸念 (T1)	-.25*	-.37*	.75*	—	.11	-.61*	-.24*	-.43*	-.47*	.51*	.68*	.04	-.47*	-.46*
5 ライバル意識 (T1)	.24*	.12	.28*	.35*	—	-.01	.25*	.09	.05	.23*	.08	.71*	.02	.09
6 本来感 (T1)	.54*	.64*	-.44*	-.51*	.09	—	.33*	.59*	.48*	-.34*	-.44*	.08	.60*	.40*
7 自己開示 (T1)	.45*	.32*	-.05	-.18*	.23*	.41*	—	.43*	.12	-.06	-.27*	.23*	.27*	.56*
8 信頼・安定 (T2)	.60*	.45*	-.23*	-.33*	.17*	.59*	.42*	—	.39*	-.28*	-.35*	.21*	.55*	.44*
9 独立 (T2)	.39*	.53*	-.24*	-.31*	.17*	.48*	.26*	.67*	—	-.41*	-.54*	.11	.49*	.22*
10 不安 (T2)	-.02	-.16*	.51*	.45*	.25*	-.26*	-.14	-.08	-.02	—	.59*	.29*	-.37*	-.26*
11 葛藤・懸念 (T2)	-.07	-.24*	.49*	.61*	.25*	-.34*	-.15	-.15	-.11	.75*	—	.17*	-.43*	-.44*
12 ライバル意識 (T2)	.18*	.08	.21*	.21*	.65*	.05	.20*	.24*	.28*	.53*	.43*	—	-.01	.03
13 本来感 (T2)	.40*	.42*	-.37*	-.33*	.15	.61*	.36*	.69*	.62*	-.11	-.17*	.20*	—	.36*
14 自己開示 (T2)	.29*	.17*	-.06	-.10	.29*	.30*	.53*	.47*	.45*	.14	.05	.39*	.55*	—

T1: Time1, T2: Time2. 対角線左下が男子 (n=147), 右上が女子 (n=157) \* $p < .05$

の、T1の“本来感”がT2の“独立”と正、“不安・懸念”と負の、T1の“自己開示”がT2の“ライバル意識”と正の、それぞれ有意な相関を示した。

以上の結果により、各下位尺度の2時点間において、一定の関連性を有する可能性が示唆されたといえる。

### 変数間の相互影響性の検討

変数間の相互影響性を検討するため、友人に対する感情の各下位尺度と自己開示または本来感の2回の測定で得られた合計得点を2つずつ用いた、交差遅延効果モデルによる検討を行った。モデル化に際し、各尺度の合計得点を観測変数として使用し、T1の観測変数間に相関関係を、T2の観測変数の誤差変数に共分散をそれぞれ組み込み (Figure 1 参照)、有意でない場合にはそれらをモデルから削除した。なお男女間で同一のモデルが採用された場合は、男女間での変数間の関連の違いを検討するため、多母集団同時分析を用いることとした。

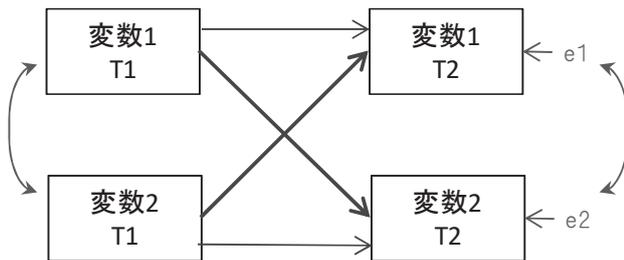


Figure 1 交差遅延効果モデル

分析の結果、男子に関しては、“自己開示”(T1)から“信頼・安定”(T2)への有意な正の影響 ( $\beta = .20$ ;  $\chi^2(1) = .743$ ,  $p = .389$ ,  $GFI = .997$ ,  $AGFI = .975$ ,  $CFI = 1.000$ ,  $RMSEA = .000$ ), “本来感”(T1)から“信頼・安定”(T2)への有意な正の影響 ( $\beta = .40$ ;  $\chi^2(1) = 1.580$ ,  $p = .209$ ,  $GFI = .995$ ,  $AGFI = .946$ ,  $CFI = .998$ ,  $RMSEA = .063$ ), “本来感”(T1)から“独立”(T2)への有意な正の影響 ( $\beta = .25$ ;  $\chi^2(1) = .361$ ,  $p = .548$ ,  $GFI = .999$ ,  $AGFI = .988$ ,  $CFI = 1.000$ ,  $RMSEA = .000$ ), “ライバル意識”(T1)から“自己開示”(T2)への有意な正の影響 ( $\beta = .18$ ;  $\chi^2(1) = .782$ ,  $p = .377$ ,  $GFI = .997$ ,  $AGFI = .973$ ,  $CFI = 1.000$ ,  $RMSEA = .000$ ) が得られた。“本来感”と“自己開示”の相互影響性についても分析したところ、“自己開示”(T1)から“本来感”(T2)への有意な正の影響が示

された ( $\beta = .16$ ;  $\chi^2(1) = 1.656$ ,  $p = .198$ ,  $GFI = .994$ ,  $AGFI = .944$ ,  $CFI = .996$ ,  $RMSEA = .067$ )。続いて女子に関しては、“信頼・安定”と“自己開示”との有意な正の相互影響 (“信頼・安定”から“自己開示”:  $\beta = .15$ , “自己開示”から“信頼・安定”:  $\beta = .16$ ; 飽和モデル), “本来感”(T1)から“信頼・安定”(T2)への有意な正の影響 ( $\beta = .32$ ;  $\chi^2(1) = 1.843$ ,  $p = .175$ ,  $GFI = .994$ ,  $AGFI = .942$ ,  $CFI = .997$ ,  $RMSEA = .073$ ), “不安・懸念”(T1)から“自己開示”(T2)への有意な負の影響 ( $\beta = -.25$ ;  $\chi^2(3) = 3.573$ ,  $p = .311$ ,  $GFI = .989$ ,  $AGFI = .962$ ,  $CFI = .996$ ,  $RMSEA = .035$ ), “独立”と“本来感”との有意な正の相互影響 (“独立”から“本来感”:  $\beta = .20$ , “本来感”から“独立”:  $\beta = .28$ ; 飽和モデル), “葛藤”(T1)から“本来感”(T2)への有意な負の影響 ( $\beta = -.31$ ;  $\chi^2(1) = .160$ ,  $p = .689$ ,  $GFI = .999$ ,  $AGFI = .995$ ,  $CFI = 1.000$ ,  $RMSEA = .000$ ) が得られた。“本来感”と“自己開示”の相互影響性についても分析したところ、“本来感”(T1)から“自己開示”(T2)への有意な正の影響が示された ( $\beta = .24$ ;  $\chi^2(2) = 3.977$ ,  $p = .137$ ,  $GFI = .988$ ,  $AGFI = .938$ ,  $CFI = .987$ ,  $RMSEA = .080$ )。

“本来感”(T1)から“信頼・安定”(T2)への影響性については男女とも同じモデルが得られたため、男女間で変数間の差異があるかを検討するために、多母集団同時分析を行った。その結果、適合度指標は、 $\chi^2(2) = 3.422$ ,  $p = .181$ ,  $GFI = .994$ ,  $AGFI = .944$ ,  $CFI = .997$ ,  $RMSEA = .049$ と良好な値が得られたことから、男女間で配置不変性が成り立つと判断した。次に、男女間での差異を検討するため、変数間の差の検定を行ったところ、“信頼・安定”(T2)の誤差分散と、誤差間の共分散の値がそれぞれ有意に異なったため、両者に等値制約を施したモデル、等値制約を誤差分散のみに施したモデル、誤差間の共分散のみに施したモデル、そして制約を施さないモデルの4つを検討した。それぞれのモデルの情報量基準(AIC)を比較したところ、順に42.80, 45.50, 43.73, 39.42という値であり、制約を課さないモデルの値が最も低かったことから、両変数に等値制約を施すことは不適である、すなわち両変数には実質的な差異がある、と判断した。

## 考 察

本研究の目的は、中学生における友人に対する感情と、親友への自己開示および本来感との経時的な関連性を検討することであった。

本研究のデータの基礎的特徴を分析したところ、まず友人に対する感情尺度の“不安・懸念”で、女子の方が男子よりもやや得点が高かった。これは榎本（1999, 2003）の結果と整合的なものであり、“女子は友人関係において交流や共有を重視することで、相手に肯定的受容を望むがゆえに不安を感じやすい”という、榎本（1999）の考察を支持するものといえる。

また、同じく友人に対する感情尺度のうち、“ライバル意識”について、男子の方が女子よりもやや得点が高かった。これも榎本（1999）と同様の結果であったことから、性役割期待の影響（和田, 1993）を含めた男女間の差異が、本研究でも確認されたと考えられる。

さらに、“自己開示”についても男女差が示され、女子の方が男子よりもやや得点が高い、という結果であった。これは、小野寺・河村（2002b）や渋谷・伊藤（2004）の研究と同じ結果であった。女性は男性よりも同族的な者に対してより積極的に開示する、とされていることから（小野寺・河村, 2002b）、今回の“同性の友人”という類似性によって、女子の自己開示は男子よりもより多くなったと考えられる。加えて、女子が男子より自己開示が多いという点は、中学生の一般的な特徴である、と考えられる。次に、友人に対する感情と“本来感”あるいは“自己開示”との相互影響性について2波のパネルデータを用いて分析を行った

その結果、まず男女ともに、“本来感”が“信頼・安定”に正の影響を及ぼすことが明らかとなった。“信頼・安定”は、“友だちとは気持ちに通い合っている”や“友達を信頼している”といった項目から構成されており、良好な友人関係を示すと考えられる。興味深いのは、こういった関係が得られていると“本来感”（自分らしさの感覚）が高まるのではなく、自分らしさが実感されている場合に、友人に対する肯定的感情が醸成されていく、という因果関係が示された点である。“本来感”の成人用尺度作成の過程で伊藤・小玉（2005）は、“本来感”が自尊感情と異なり積極的な他者関係にも関連することを示し、

その理由として“本来感”に特徴的な自律性を促進させる要因として Deci & Ryan (1995) が指摘した、無条件の肯定的配慮のある社会的文脈の影響を挙げている。伊藤・小玉（2005）の調査も1時点のものであるため、逆の因果関係が存在する可能性も否定できないが、少なくとも中学生の友人関係においては、中学校入学以前までの無条件の肯定的配慮のある社会的文脈、あるいは学校の友人関係以外の、例えば家族関係といった人間関係によって培われた“本来感”が、友人への信頼感の土台になっている可能性が考えられる。なお、誤差分散や誤差共分散が男女で異なることが示されたことから、“信頼・安定”に及ぼす他の変数や、それらと“本来感”との関連性の差異の性差も検討していくことが必要である。

また、男子は“本来感”から“独立”に正の影響が示されたのに対し、女子では両者の間に相互の影響性が示された。“独立”は“友達と違う意見でも自分の意見はきちんと言う”など、安易に友達と同調しない、アイデンティティの形成に関わる独立的な側面を測定していると考えられる。この結果からは、男子は友人に対して“独立”であることが自分らしさの感覚をもたらすというより、自分らしさの感覚がある場合に、友人に対する“独立”的な態度が形成される、と解釈される。このように男子に関しては、“信頼・安定”と同様に、自分らしさの感覚である“本来感”が、“独立”よりも時間的に先行していることが想定されることから、“本来感”の獲得が支援に際し有用であると考えられることから、今後のさらなる検討が必要である。

一方女子については、相互影響性、すなわち“独立”が“本来感”を高めるという結果も示された。黒沢・有本・森（2005）によると、中学生女子のうち、仲間への同質性への欲求が高い場合、ストレス反応も高くなる。このことから、先述のような思春期女子に特徴的な、チャムグループと呼ばれる友人関係の様態は、女子にとって必ずしも本意ではない、表面的な適応行動である可能性が示唆される。本来感が低い場合にストレス反応は高まることから（鈴木・小川, 2008）、中学生女子に関しては、表面的な友人関係の良さと同質的な適応感を区別して考える必要がある、と思われる。

また“本来感”には、女子のみ“葛藤”から負の影響を受けていた。“葛藤”は“友だちといるとじぶん

のやりたいことができない”といった、友人関係でのジレンマに関係する項目群である。チャムグループの特徴が男子よりも強いとされる女子は、友人関係において友人に対して自分の考えを言えない、友人の行動に巻き込まれて困るといった、友人に対する困惑した否定的な感情を学校生活の中で抱く機会が多いと推測される。したがって、友人と異なる意見や価値観に関することがらは友人関係において表出しにくく、そういった意見を言えずに取り繕ったりする態度が、本来感を低めることになるのかもしれない。

以上をまとめると、男女とも自分らしさの感覚である“本来感”と“友人に対する感情”には関連性があるが、男女によって影響のプロセスは異なり、男子は“本来感”が基盤となって友人に対する感情が形成されるものの、友人に対する感情は“本来感”には直接影響しない、と考えられる。一方の女子ではむしろ“友人に対する感情”が“本来感”に影響を及ぼす、すなわち“友人に対する感情”が先立つ傾向にある、といえる。これは、友人への感情、あるいは中学生における友人という存在の心理的機能が、男女で異なることを示唆するものであり、今後より詳細な検討が必要である。

次に“自己開示”との関連について、男子では、“信頼・安定”に対する正の影響が見られ、女子では両者の間で相互の影響性が示された。森内・塩見(2007)によると、男女ともに友人に対する自己防衛は、その他の人物に対する場合より高い傾向にある。これは、自分が親友からどのように見られているのか、という点での不安感が関係していると思われるが、“自己開示”が友人に受容された場合、こういった不安感が解消されるとともに、親友に対する信頼感が高まるものと思われる。大見(2001)によると、“自己開示”を多く行っている生徒は、学校生活を楽しいと感じている場合が多いことから、“自己開示”から影響を受けた友人に対する信頼感、学校生活の享受感情にも影響していると考えられる。

一方女子に関しては、“信頼・安定”が“自己開示”を促進する、という結果も得られた。服部(2007)によると、中学生女子の約7割が自分の友人グループを自身の居場所であると認識し、またそういった女子は“自己開示”も高いことが示されている。こういった親密なグループにおいては、自己の内面的

なトピックも話題になりやすく、“自己開示”を行う機会が多いのかもしれない。Altman & Taylor(1973)の社会的浸透化理論を踏まえると、“自己開示”は親密度が増すことで表面的な内容から内面的な開示へと変化することが想定されることから、“自己開示”が、友人への“信頼・安定”を高めることでグループの凝集性を高め、親密さを増したグループ内ではより内面的な“自己開示”が促進される、といった循環が生じていると推測される。

また、男子のみ“ライバル意識”から“自己開示”への正の影響が見られた。すなわち、友人に対して“ライバル意識”が高いほど、“自己開示”をするという結果であり、このことから男子の“自己開示”に関しては、競争的な側面を有していることが考えられる。一方で、先述のように男子における“自己開示”は“信頼・安定”にも正の影響を及ぼすことを踏まえると、“ライバル意識”によって“自己開示”を多く行うことは、相手に対する優越感を獲得するといったことに加え、その行為や内容を友人が受容的に受け止めるなどした結果、友人に対する信頼感が増す、といったプロセスが想定される。このことから、男子の友人への“ライバル意識”は、友人関係を深化・発展させる肯定的側面を有している可能性も考えられる。したがって“ライバル意識”を、友人関係を損なうものとして安易に否定的に捉えるのではなく、その肯定的な機能も含めて多面的に理解する必要があることが示唆されるため、今後さらなる検討が必要である。

次に、女子のみ“葛藤”から“自己開示”への負の影響が見られた。先に述べたように“葛藤”は、友人関係での価値観などのズレに伴うジレンマに関係するものである。保坂(1996)が指摘しているように、チャムグループは互いの共通点や類似点を確かめ合うことによって形成・維持されることが特徴的な友人関係であることから、友人との間に生じている価値観などの食い違いはなるべく表出せず、相手に同調的な行動を取る方が望ましくなる。したがって、“葛藤”が高いと“自己開示”は抑制され、他者の価値観や行動欲求に自分を合わせるようになる、と考えられる。先に示したように、“葛藤”は“本来感”にも負の影響を及ぼすことから、特に女子に関しては、こういった友人に対する葛藤感情を考慮することが、学校における適応感向上を図るうえで重要であるといえる。

なお“本来感”と“自己開示”の関連性については、男子では“自己開示”から“本来感”へ正の影響を示した一方、女子では“本来感”から“自己開示”への正の影響が示された。男子に関しては、“自己開示”で自分らしさを友人に提示し受容的な対応を示されることが、自分らしさの感覚を形成するのに役立つと考えられる。また、“自己開示”は友人への信頼感に直接的に影響する場合と、“本来感”の向上を介して間接的に影響することが予想されることから、無理のない範囲での“自己開示”を促すことが、男子の学校適応感向上に寄与するかもしれない。一方女子は、自分らしさの感覚を形成していることが“自己開示”を促すと考えられ、“自己開示”は自分らしさの感覚をベースにして良好な友人関係を育むための手段としての機能を有していることが考えられる。和田（1995）は、自己開示の欲求と実際の自己開示量とのギャップや、自己開示量と主観的幸福感との関連において、自己開示をすればするほど幸福が高まるのではなく、幸福を感じる適度な開示量が存在する可能性を示唆している。こういった自己開示の質的側面が、男女間のプロセスの差異に影響していることも考えられる。

また、このように男女間で異なる因果関係が示されたことから、今後の研究においても性差を検討することが有用であろう。

最後に本研究の課題について述べる。

まず実施時期に関して、本研究の1回目の調査は7月に行われている。この時期は、1学期の生活を通して新学年での人間関係がある程度定着してきた頃であると考えられる。そのため、例えば新年度開始直後の4月に1回目の調査を行った場合には、新しい環境で友人関係が安定しておらず、したがって自己開示のあり方が異なることも考えられる。あるいは2学期以降の時期でも友人関係は違った様相を呈する可能性もあり、実施時期を様々に変更することで、さらなる知見が得られるかもしれない。

次に、自己開示の様式に関して述べる。丹羽・丸野（2010）は大学生を対象とした研究において、自己開示の深さを考慮する必要性を指摘している。また橋詰（2010）は自己開示研究において、話してはいるが本音を話していない場合は全く話したことがない場合と等価であるとみなされる、というこれまでの研究の問題点を指摘し、両者を区別するために“見せかけの自己表現”という概念を提案している。

本研究では自己開示の内容の真実性については検討していないが、自己開示には返報性も存在するため、相手の自己開示に合わせるために、といった、状況依存的な場合も考えられる。したがって、こういった自己開示の質的側面をより細かく検討することが有意義であると思われる。

また岡田（2006）は、友人に対する外発的または内発的動機づけの差異が自己開示における表面性／内面性に異なった影響を及ぼすことを示しているほか、岡田（2008）は、友人関係の研究について、親密な友人関係を築いているかどうかの個人差要因を組み込むことの有用性を指摘している。こういった視点も、知見の洗練には有用であろう。加えて和田（1995）は、自己開示の欲求と実際の自己開示量とのギャップや、自己開示量と主観的幸福感との関連において、自己開示をすればするほど幸福が高まるのではなく、幸福を感じる適度な開示量が存在する可能性を示唆している。こういった自己開示の質的側面についても検証が必要である。

最後に自己開示の対象者に関してだが、中学生は高校生などと比較して異性と日常的なやり取りをすることも多いとされる（大井・宮本，2009）。第二次性徴に伴って異性を意識し始める年代でもあることから、異性に対する感情や自己開示との関連を検討することも今後の課題である。

こういった課題を検証し、中学生の自己開示に関する知見を蓄積することで、中学生の心理的成長や学校適応感を促進していくことが望まれる。

#### 〈注〉

- 1) 類似の概念として印象操作研究における自己呈示があるが、自己呈示は非言語的伝達手段を含むこと、また意図性が高い点で、自己開示と区別されることが多い（例えば森内・塩見，2007）。
- 2) 回答傾向から、2回のいずれかまたはいずれも、欠席ないし回答拒否（白紙）が26名、途中から回答拒否が1名と判断された。記入漏れやミスが見られたのは34名で、特定の学年・組・性別に偏ってはいなかった。さらに記入漏れ・ミスは全44項目中23項目で発生しており、2回の調査を合計した発生者数の割合は0.3－1.5%と極めて低かったことから、記入漏れ・ミスは完全にランダムな欠測であると判断した。
- 3) 実施校との事前の打ち合わせで、現在の中学生

に理解しにくいと指摘された一部の項目に修正を施した。具体的には、友人に対する感情尺度のうち、“心から友達を親友といえる”を“心から親友といえる友達がいる”に、“友達に裏切られるのではと思う”を“友達に裏切られるのではないかと不安に思う”に、本来感尺度のうち、“いつも揺るがない「自分」をもっている”を“いつでもしっかりとした「自分」をもっている”に、それぞれ修正した。また、漢字の一部に振り仮名を施した。

## 引用文献

- Altman, I., & Taylor D. A. (1973). *Social Penetration*. New York: Holt, Rinehart & Watson.
- Deci, D. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy: the basis for true self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy agency, and self-esteem*. New York: Plenum. pp.31-46.
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 榎本淳子 (2003). 青年期の友人関係の発達の变化—友人関係における活動・感情・欲求と適応— 風間書房
- 藤井恭子 (2001). 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, 49, 146-155.
- 橋詰郁恵 (2010). 中学生における“自己”および“友人”の見せかけの自己表現に対する認知とストレス反応の関連 九州大学心理学研究, 11, 185-193.
- 服部香子 (2007). 女子中学生の同性友人グループに関する研究—「グループ」に対する認識の違いに注目して— 日本青年心理学会第14回大会発表論文集, 38-39.
- 保坂一乙 (1993). 中学・高校のスクール・カウンセラーの在り方について—私立女子校での経験を振り返って— 東京大学教育学部心理教育相談室紀要, 15, 65-76.
- 保坂 亨 (1996). 子どもの仲間関係が育む親密さ—仲間関係における親密といじめ— 現代のエスプリ, No.353, 43-51.
- 飯田淳子 (2003). 中学生における学校生活スキルと学校生活満足度との関連 学校心理学研究, 3, 3-9.
- 伊藤亜矢子・松井 仁 (2001). 学級風土質問紙の作成 教育心理学研究, 49, 449-457.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自損感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.
- 伊藤美奈子 (2006). 不登校の子の理解と支援 (2) —不登校の子どもの気持ち— 児童心理, 60, 697-703.
- Jourard, S. M. (1971). *The transparent self*. Van Nostrand Reinhold.
- (ジェラード, S. M. 岡堂哲雄 (訳) (1974). 透明なる自己 誠信書房)
- 高坂康雄 (2010). 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向—青年期における変化と友人関係満足度との関連— 教育心理学研究, 58, 338-347.
- 黒沢幸子・有本和晃・森 俊夫 (2003). 女子中学生の仲間関係のプロフィールとストレスとの関連について 目白大学人間社会学部紀要, 1, 13-21.
- 松永真由美・岩本澄子 (2008). 現代青年の友人関係に関する研究 久留米大学心理学研究, 7, 77-86.
- 松島るみ (2000). 自己開示と青年の友人関係 応用教育心理学研究, 17, 29-36.
- 松島るみ・塩見邦雄 (2000). 中学生の自己開示と孤独感について 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 145.
- 松下姫歌・吉田茉悠紀 (2007). 現代青年の友人関係における“希薄さ”の質的側面 広島大学大学院教育学研究科紀要 (第三部), 56, 161-169.
- 文部科学省 (2012). 平成23年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果について 文部科学省2012年9月 <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/24/09/1325751.1325751.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/1325751.1325751.htm)> (2013年4月2日アクセス)
- 森内英久・塩見邦雄 (2007). 自己意識との関連を中心にした自己開示とその促進要因の発達のな変化についての研究 応用教育心理学研究, 23 (1), 12-22.
- 中村雅彦 (1985). 対人魅力の規定因としての自己開示 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科),

- 32, 201-213.
- 丹波 空・丸野俊一 (2010). 自己開示の深さを測定する尺度の開発 パーソナリティ研究, 18, 196-209.
- 小口孝司 (1991). 母親の自己開示と養育態度が子どもの自己開示と学級集団への適応に及ぼす効果 社会心理学研究, 6, 175-183.
- 大井由莉菜・宮本正一 (2009). 青年期における異性ととの友人関係 岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学), 58(1), 177-186.
- 大見サキエ (2001). 中学生の自己開示の研究—学校生活を中心に— 応用教育心理学研究, 19, 13-24.
- 岡田 涼 (2006). 自律的な友人関係への動機付けが自己開示および適応に及ぼす影響 パーソナリティ研究, 15, 52-54.
- 岡田 涼 (2008). 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築 教育心理学研究, 56, 575-588.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 小野寺正己・河村茂雄 (2002a). 中学生の学級内における自己開示が学級への適応に及ぼす効果に関する研究 カウンセリング研究, 35, 47-56.
- 小野寺正己・河村茂雄 (2002b). 中学生用学級内自己開示尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 カウンセリング研究, 35, 133-138.
- 折笠国康・庄司一子 (2010). 中学生の本来感の検討—学級風土による違いとの関連から— 共生教育学研究, 4, 13-22.
- 渋谷郁子・伊藤裕子 (2004). 中学生の自己開示—自己受容との関連で— カウンセリング研究, 37, 250-259.
- 嶋田洋徳 (1998). 小学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 風間書房
- 曾山和彦・本間恵美子・谷口 清 (2004). 不登校中学生のセルフエスティーム, 社会的スキルがストレス反応に及ぼす影響 特殊教育学研究, 42, 23-33.
- 鈴木真吾・小川俊樹 (2008). 中学生における自尊心と被受容感からみたストレス反応・本来感の検討 筑波大学心理学研究, 36, 97-104.
- 高比良美詠子・安藤玲子・坂元 章 (2006). 縦断調査による因果関係の推定—インターネット使用と攻撃性の関係— パーソナリティ研究, 15, 87-102.
- 高木浩人 (2006). 大学生の自己開示と孤独感の関係—開示者の性別, 開示相手, 開示側面の検討— 愛知学院大学心身科学部紀要, 2, 53-59.
- 戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二 (1997). 中学生の社会的スキルと学校ストレスとの関連 健康心理学研究, 10, 23-32.
- 遠矢幸子 (1996). 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥野秀宇 (編著) 親密な対人関係の科学 誠信書房 pp.89-116.
- 和田 実 (1993). 同性友人関係—その性および性別役割タイプにおける差異— 社会心理学研究, 8, 67-75.
- 和田 実 (1995). 青年の自己開示と心理的幸福感の関係 社会心理学研究, 11, 11-17.

(2013年5月7日受付)

(2013年7月10日受理)

